

磐梯山ジオパーク

エリア別ジオサイトマップ

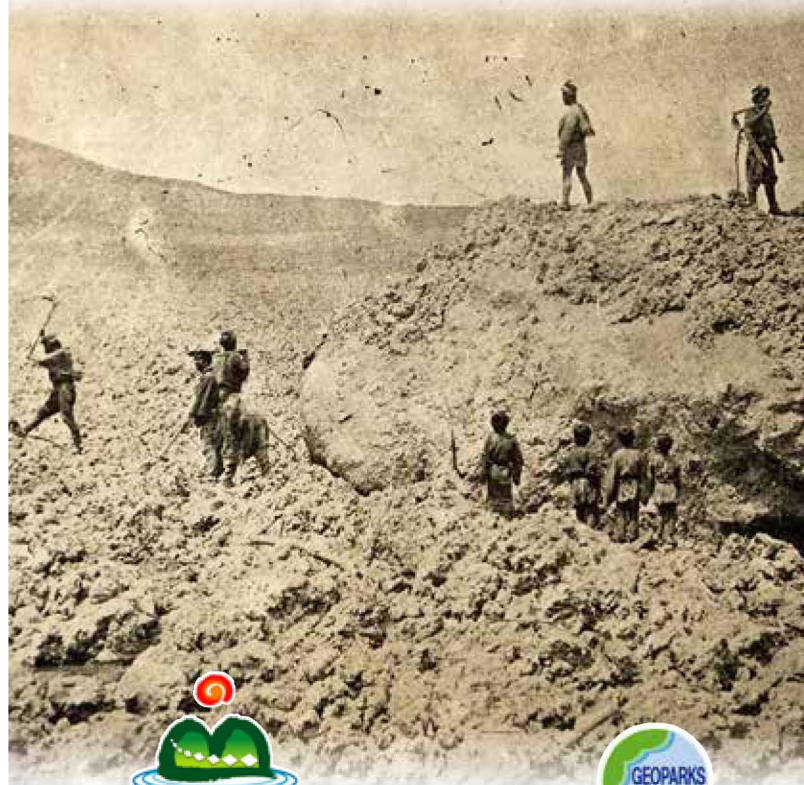


発行：磐梯山ジオパーク協議会

磐梯山ジオパーク エリアガイドブック

猪苗代中央 エリアH

磐梯山南麓にある神社・城跡などの
歴史遺産と1888年噴火の爪痕



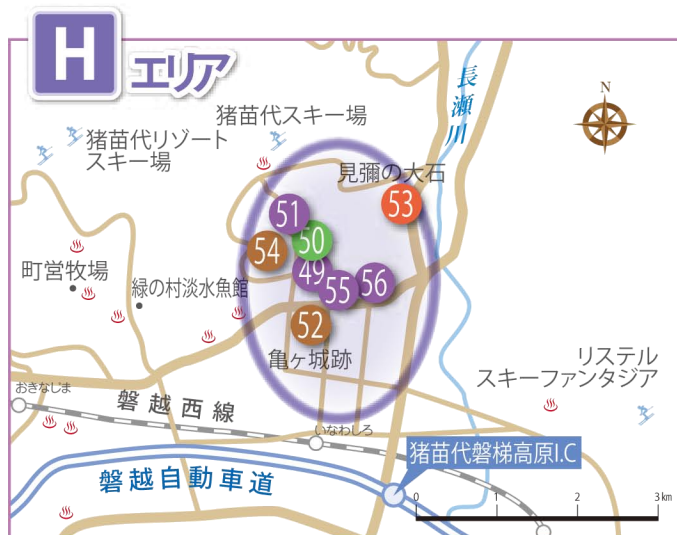
磐梯山ジオパーク
BANDAISAN GEOPARK



猪苗代中央エリア

CONTENTS

1. 猪苗代中央エリアの地形と地質 2
2. 火山噴出物と亀ヶ城 3
3. 亀ヶ城の歴史 4
4. 磐梯神社と大鹿桜 5
5. 伝説「磐梯山の魔魅～足長・手長～」 6
6. 初代会津藩主保科正之と土津神社 7
7. 見祢の大石と1888年の噴火 10
8. 岩田善平と見祢の大石 11
9. 災害の象徴としての家屋と小林栄 12
10. 1888年噴火の慰霊碑 13



交通 自動車で磐越道猪苗代ICから約4km、10分

- 49 磐梯神社：延喜式内社として広く信仰を集める
- 50 大鹿桜：天暦年間に京都から運んで植えた桜
- 51 土津神社：会津初代藩主保科正之を祀る神社
- 52 亀ヶ城：磐梯火山の火山噴出物上に築かれた城
- 53 見祢の大石：1888(明治21)年噴火で運ばれた巨石
- 54 磐梯山炎死者招魂碑：1888(明治21)年噴火の犠牲者の碑
- 55 磐梯山破裂罹災死没之墓：西門寺にある犠牲者の墓
- 56 招魂之碑：西勝寺にある噴火の慰霊の碑

※公共交通機関の本数が少ないため、自動車利用がおすすめです。

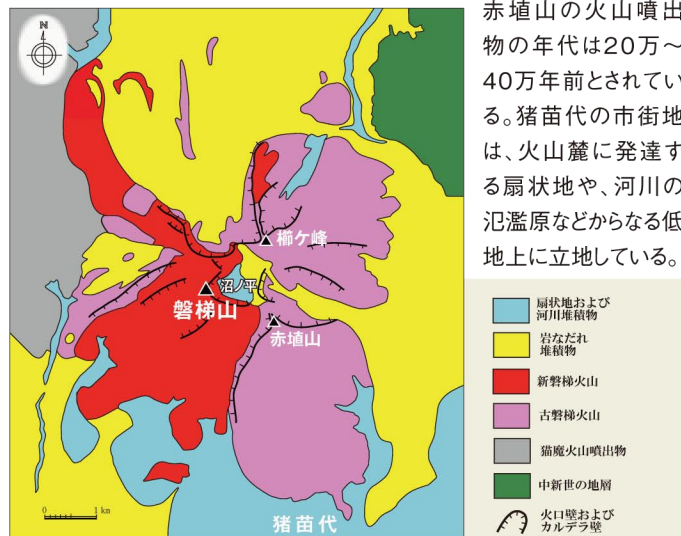
1 猪苗代中央エリアの地形と地質

磐梯火山は、主峰である大磐梯(標高1816m)、櫛ヶ峰(1636m)、赤埴山(1430m)の三つの山体からなる成層火山であり、それらに取り囲まれて中央に径約1kmの沼ノ平の凹地(標高約1400m)がある。かつては大磐梯のすぐ北側に小磐梯(推定標高約1750m)の山体があったが、1888年の噴火で崩壊して失われた。

磐梯火山は古磐梯火山と新磐梯火山の新旧二つの火山体、さらにこれより古い先磐梯火山と呼ばれる山体から成っている(図1)。先磐梯火山の山体は、磐梯火山の最初の活動で形成されたと考えられているが、1888年の爆裂カルデラ壁の下部に露出しているのみであり、その年代はおよそ70万年前である。古磐梯火山はかつて大きな山容を誇っていたと推定されるが、現在は櫛ヶ峰や赤埴山がその一部として残っている。新磐梯火山は、現在の主峰である大磐梯と崩壊した小磐梯で構成されている。古磐梯火山は約4万年前の翁島岩なだれ(用語解説:14P)、新磐梯火山は1888年の岩なだれなど、いずれも山体形成後に大崩壊を起こしている。

猪苗代中央エリアは、古磐梯火山の一部である赤埴山の山麓部に位置する。赤埴山を造っている岩体は、下部は厚い溶岩が発達し、上部はスコリア(用語解説:14P)や火山弾を含む火山灰層で覆われている。これら

赤埴山の火山噴出物の年代は20万～40万年前とされている。猪苗代の市街地は、火山麓に発達する扇状地や、河川の氾濫原などからなる低地上に立地している。



(図1) 磐梯山の地質図 千葉・木村(2001)作成の図を簡略化

2 火山噴出物と亀ヶ城

亀ヶ城(猪苗代城)跡があるなだらかな小丘(写真1)は、今から20万～40万年前に、赤埴山を造った火山活動で噴出した溶岩や火山灰が、ここまで流れてきて形成された地形である(図2)。亀ヶ城は、磐梯山の火山活動でできた地形をうまく利用して立地している。



(写真1) 亀ヶ城(猪苗代城)跡がある丘陵



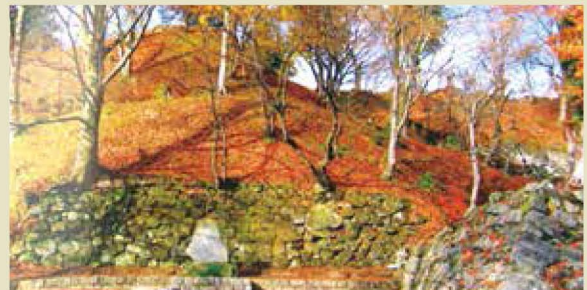
3 亀ヶ城の歴史

中近世の猪苗代地方を統治する拠点として機能した猪苗代城は、古くは亀ヶ城と呼ばれ、磐梯山南麓より沖積地に突出した地形を巧みに利用して縄張された平山城であり、中世には猪苗代氏代々の居城、近世には会津藩の東を守る支城として幕末まで城代が置かれた。本丸には文禄～慶長期の野面積石垣や櫓門の礎石が残り、往時の姿を偲ばせる。

また1589(天正17)年に南奥の覇者を決すべく会津の輩名義広と米沢の伊達政宗が戦った摺上原古戦場は、この磐梯山南麓の広大な裾野に展開している。



(図3) 亀ヶ城と磐梯山(福島県立図書館蔵)



(写真2) 亀ヶ城跡

4 いわはし おおしかざくら 磐梯神社と大鹿桜

磐梯神社

応仁天皇の御代(西暦270年ころ)、磐梯明神として磐梯山頂に祀ったのが始まりと言われ、729(天平元)年に現在の場所に遷座されたと伝えられている。10世紀の始めに編さんされた「延喜式」の神名帳に耶麻郡一座として記載され、社格の高い神社であった。猪苗代城を築いた猪苗代氏をはじめ代々の領主に庇護されてきて、社殿も荘厳なものだったと伝えられている。

1609(慶長14)年に切支丹であった岡越後が会津領主・蒲生秀行の猪苗代城代となると、社領は没収、社殿は焼かれ参拝が禁止された。その後、初代会津藩主・保科正之は荒れた神社を復興、自ら祀られる神社を磐梯神社の末社とし、近隣の信仰を集めている。毎年、開催されている磐梯祭りの「御神火行列」の出発地点になっている(写真3)。

大鹿桜

会津の五桜のひとつであるこの大鹿桜は菊咲きのサトザクラで、磐梯神社の本社手前の左側にある。開花の時は白色だが、暫時、鹿の色に変わることからこの名が付けられたといわれている。村上天皇の御代、947(天曆元)年勅使が登山参拝した時に、京都より移植されたという老古木だが、今も5月上旬になると満開となり、美しい姿が楽しめる(写真5)。



(写真3) 磐梯神社を出発する御神火行列



(写真4) 磐梯神社社殿



(写真5) 大鹿桜

5 まみ 伝説「磐梯山の魔魅～足長・手長～」

足長・手長の話は、全国的に広く分布しているものだが、会津地方各地には「磐梯山の足長・手長」として語り継がれている。猪苗代に伝わる足長・手長の伝説は、次のようなものである。

昔々、猪苗代盆地がまだヨシ谷地に覆われ、磐梯山は病悩山^{わざらしやま}と呼ばれていたところである。磐梯山には足長・手長という魔物が住んでいた。夫の足長は、磐梯山と高田にある明神ヶ嶽にまたがって、雲をあつめお日さまをさざぎっていた。妻の手長も磐梯山に腰をかけ、長い手で猪苗代湖の水をかきあげて振りまくので、毎日、風雨にさらされ、そのために作物が実らず、人々は大変困っていた。

そこに、旅の坊さんが通りかかり、退治することになり、魔物を呼び出した。「お前たちは、たいそう大きな身体をしているが、小さくなって、この手のひらにある鉄鉢の中には入れないだろう。」という、自慢げにどんどん小さくなって鉄鉢の中に入ってしまった。

坊さんは、この時とばかり、鉄鉢を自らの法衣で縛り、磐梯山頂に伏せて、魔物が二度と出られないように大きな石を乗せて、呪文を唱えて密閉してしまった。坊さんは、「これからはこの山の明神さまとして祀るから、民のためになるように尽くさない。」と言い聞かせた。後に、麓に拝殿を造り、磐梯神社としたということである。その坊さんは全国を行脚していた弘法大師で、会津の人々が身も心も健康でいられるようにと、会津に五体の薬師像も安置した。(魔魅は14Pに用語解説)



6 初代会津藩主保科正之と土津神社

保科正之は、徳川2代將軍秀忠の子として生まれ、信州高遠、出羽最上を経て会津藩主となり、名君ぶりを発揮した。また、4代將軍家綱の後見役として幕政に携わり、明暦の大火後の江戸の復興、玉川上水の建設、殉死の禁止など数々の功績をあげた。学問に秀でて、特に神道の師・吉川惟足より

「土津靈神」の靈号を授かった。正之は自ら猪苗代の地を訪れ、古社・磐椅神社の末社として祀るよう遺言し、没後1675(延宝3)年に「土津神社」が、会津の城を守る鬼門の位置に創建された。以後、土津神社には9代までの歴代の藩主が祀られている。



(写真6) 土津神社社殿



(図4) 保科正之(土津神社蔵)

創建当初は東北の日光と言われる程の豪華絢爛であったが、戊辰戦争で焼失、ご神体は一時、斗南藩(青森県)に遷され、社地は没収された。1874(明治7)年にご神体は、猪苗代に戻り、磐椅神社に仮遷宮された。その後、社地は有志により買い戻され、社殿も1880(明治13)年再建され現在に至る。神社、奥の院ともに会津藩主松平家墓所として国指定史跡となっている。

土田堰

土津神社の祭田料とするため1674(延宝2)年に土田新村を開き、その用水とするため開削された堰で、今でも多くの田んぼを潤している。近世期には、この堰を利用して、流し木をして、若松城下に薪を供給していた。土津神社や磐椅神社の御手洗川ともなっている。



(写真7) 土田堰

奥津城(奥の院)

神社の東にある参道に登っていくと、奥の院と呼ばれている保科正之の墓所がある。正之は1672(寛文12)年12月18日、江戸・箕田(三田)の会津藩下屋敷で亡くなると、翌年の3月に遺言どおり遺体は猪苗代に安置された。正之は亡くなる前年に猪苗代を訪れた時に「万代と いはひ来にけり



(写真8) 保科正之の墓

り会津山 たかまの原のすみかもとめて」と詠じると同行した吉川惟足は「君ここに 千とせの後のすみどころ 二葉の松は雲を凌がん」とかえした。

土津靈神の碑

儒学者・山崎闇斎が撰文し、能書家・土佐左兵衛の筆による正之の事績(用語解説:14P)が、1943文字に刻まれている。亀趺(台座・亀石)と竿石を合わせると高さ7m余に及ぶもので、日本では最大の碑と言われている。亀



(写真9) 土津靈神の碑

趺は近くの土町から、竿石は16キロほど離れた八田野から、3千人を要して運んだもの。亀石は鬼門の北を向いて据えられている。

田中正玄の墓

正玄の父は武田勝頼に従って長篠の合戦で戦死し、正玄は佐渡で生まれた。15歳のとき、信州高遠藩主の正之に仕え、最上、会津に移封(用語解説: 14P)とともに藩政を司り、1666(寛文6)年には、藩の最高の指導者の御家司となった。当時の幕府大老土井利勝が、天下の三家老の一人に上げたほどの人物であった。霊号を信彦霊社といい、土津神社の末社となる。



(写真10)田中正玄の墓

服部安休の墓



(写真11)服部安休の墓

儒学者、神道家。江戸に生まれ、幼くして林羅山に朱子学を学ぶ。その後、正之に仕え、吉川惟足より神道を学んだ。『会津神社誌』の編さんに努め、会津領神社管領職を命じられる。土津神社が創建されると、初代の神官となり、遺言により、正之の眠る見祢山の麓に葬られる。進功霊社として土津神社の末社となる。森蘭丸の孫。

キリシタン殉教地(バテレン塚)

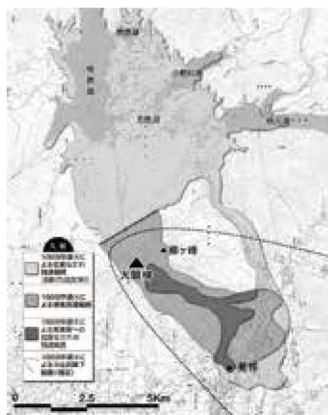
キリシタン大名であった若松城主蒲生氏郷のとき、猪苗代城代であった岡越後は熱心なキリスト教信者で、猪苗代にセミナリオ(神学校)も開設し、布教に努めた。蒲生忠郷のとき、猪苗代城代となった岡左衛門佐は、幕府の禁教の方針に沿う形で、キリスト教信者の迫害を行った。この塚は、殉教した人たちの耳を葬ったところ(耳塚)とも、岡越後夫妻や子供の墓とも言われている。碑は近年に建立された。



(写真12)キリシタン殉教地

7 見祢の大石と1888年の噴火

磐梯山の1888年の噴火と言えば、北側へ小磐梯が山体崩壊をして岩なだれとなり、甚大な被害を与えたことで有名である。しかし、南東側の猪苗代町にも同じような岩なだれが発生していたことはあまり知られていない。被災したのは猪苗代町の北東部に位置する渋谷・白木城・伯父ヶ倉から見祢にかけての地域である。その中でも見祢は噴火による被害地の南端に位置する。



(図5)1888年の噴火の被害の図(中央防災会議)

この時の噴火では、岩なだれは櫛ヶ峰と赤埴山の間にある琵琶沢にも流れ、合わせてブラスト(爆風)も発生した。琵琶沢を流れ下った岩なだれは、川の水と混じり泥流となって見祢集落を襲った。その泥流で流されてきたものが、見祢の大石である。この大石だけが有名となっているが、実は琵琶沢の途中には今でも大きな岩が点在している。

この見祢の大石は、高さ3.1m、長さ8.2mの巨大なもので、自らの重さで年々沈下し、現在はその3分の1ほどが埋没している。1941(昭和16)年には国の天然記念物に指定された。



(写真13)見祢の全景(田中美代二撮影:国立科学博物館蔵)

8 岩田善平と見祢の大石

磐梯山の噴火では多くの写真が撮影されている。現在、確認されているものでも150点を超える。その中で、福島県内に住む人が撮影したものは少ない。噴火直後に会津若松から撮影された写真と、喜多方で写真館を営んでいた岩田善平が猪苗代と北塩原で撮影した14点がほとんどである。

岩田が最初に訪れた災害の場所が見祢地区で、噴火翌日の16日にここで4点の写真を撮影している。最初に南側から集落の全景を写し、2番目に見祢の大石を撮影している。見祢の大石の写真を見ると岩の上に二人が上がっていて、これは噴火で行方不明になった人を探していたのである。噴火翌日に現場に入れたからこそ、撮影できたのである。東京からカメラマンが到着するのは、噴火から四日目以降であるため、彼らが見祢の大石に着いた時には、その岩の上には人はいなかった。そして、見祢の大石の北側の琵琶沢方面には大きな岩がいくつか見えたので、この大石だけが特別なものとは感じられなかったのであろう。



(写真14) 見祢の大石(岩田善平撮影:竹内写真館蔵)



(写真15) 見祢の被害(岩田善平撮影:竹内写真館蔵)

9 災害の象徴としての家屋と小林栄

見祢の被害は、地区の東側を泥流が流れたことによるもので、住民の14名が犠牲となっている。見祢の大石は集落の中央の北東側に位置しているが、この大石を撮影した人は少ない。

それに対して、同じ家屋を3人が撮影し、1人がスケッチで残している。その家屋は建物の東側が骨組みだけとなり、西側は壊れていない状態であった。



(写真16) 被災した家屋(W・K・バルトン撮影:国立科学博物館蔵)

東京から来た人が4人も同じ家屋を撮影したりスケッチすることは、普通に考えるとありえないことである。つまり、東京から来た人々は案内されてこの家屋の前に立ったのである。半分だけ壊れた家が磐梯山の噴火による災害の象徴と考えたのではないだろうか。案内した人は、東京から来訪者が役場に来ると、必ず案内を依頼されたそうである。野口英世の恩師である小林栄がその人である。彼は、噴火の様子を時間を追ってスケッチに残している。当時、猪苗代町では一番の知識人が彼であったので、役場では彼に依頼したのである。

2011年3月に東北地方太平洋沖地震が発生し、多くの災害遺構(用語解説:14P)となるべきものが出現したが、住民の反対であまり残されていない。磐梯山の噴火の時代に災害遺構という考え方があれば、この家屋は残されたのではないだろうか。



(図6) 被災した家屋(ジョルジュ・ピゴー描画:宇都宮美術館蔵)

10 1888年噴火の慰霊碑

磐梯山噴火は多くの犠牲者を出したので、被災地にいくつかの慰霊碑が建立された。このエリアには、3ヶ所の慰霊碑がある。磐梯祭りで執り行われる磐梯山噴火の慰霊祭は、碑の建立されている西円寺と西勝寺で毎年交代で行っている。



磐梯山災死者招魂碑^{しょうこんひ}

篆額/陸軍大将・熾仁親王
撰文/内閣書記官長・小牧昌業
書 /元老院議員・巖谷 修
明治22年7月建立
所在地 猪苗代町土町

碑文には、磐梯山噴火の被害状況、被災者数、義捐金などが記録されている。被災地に建立されている慰霊碑の中では一番大きいもので、台座は、猫石と呼ばれている自然石を使用している。



磐梯山破裂罹災死没之墓^{りさい}

明治22年10月15日建立
所在地 猪苗代町新町 西円寺境内

磐梯山噴火で犠牲になった姓名の不詳者52人を合葬したもので、恩賜金や義捐金によって建立された。



招魂之碑^{しょうこんのひ}

撰文/南摩 綱紀
書/東京 成瀬 温
建立者/北会津郡若松七日町 故玉川正興妻 清子
明治21年9月建立
所在地 猪苗代町新町 西勝寺境内

建立者の玉川清子は磐梯山噴火で犠牲になった人々を悼んで、この碑を建立した。盆踊りは、この碑を囲んで行われていたこともある。

【用語解説】「岩なだれ」

大規模かつ高速で起こる山体の崩壊現象。火砕流や泥流とは異なり、破壊された大小の岩が、マグマ物質を含まず、水もほとんど含まない状態で流れ下る。岩なだれの堆積地域では、起伏のある丘陵(流れ山)が形成される。岩屑なだれとも言う。

【スコリア】

鉄とマグネシウムに富むマグマが噴出して固まったもの。黒色、暗褐色などの暗い色で、固まる時に発砲したくさんの細かい穴があいている。

【魔魅】

人を惑わすばかりのもの

【事績】

ある人の成しとげたことがら。業績

【移封】

諸大名の領地をうつすこと。国替

【災害遺構】

災害とは、噴火、地震、津波などの突発的な自然環境の変化や人為的な原因で、人命や社会に多大な被害を与える現象のこと。被害を受けた建物など災害の具体的な影響を示す構造物を災害遺構と言う。災害遺構を保存することで、過去にどのような災害があったかを後世の人々が理解しやすく、防災意識が長く続く効果もたらされる。広島原爆ドームが有名な例。

【資料提供者】 宇都宮美術館・国立科学博物館・竹内写真館・土津神社・福島県立図書館

【参考文献】 ・千葉茂樹・木村純一(2001) 磐梯火山の地質と火山活動史—火山灰編年法を用いた火山活動の解析—。岩石鉱物科学第30巻 第3号 p.126-156。
・国土地理院(2003) 1:30,000 火山土地条件図「磐梯山」。
・佐藤公(2005) 被害と応急対応、災害教訓の継承に関する専門調査会(編)「1888磐梯山噴火報告書」 内閣府中央防災会議。

磐梯山ジオパーク エリアガイドブック 

猪苗代中央エリア

2014年3月発行

■ 執筆・編集者 竹谷陽二郎・小松山六郎・兼田芳宏・佐藤公

■ 発行 磐梯山ジオパーク協議会
〒969-2701 福島県北塩原村大字桧原字剣ヶ峯 1093
北塩原村自然環境活用センター内
TEL:0241-32-3180 FAX:0241-32-2927
URL://www.bandaisan-geo.com

■ 印刷 東北紙工(株)